

---

# Dance With The Freak

ユート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dance With The Freak

### 【Nコード】

N9470Y

### 【作者名】

ユート

### 【あらすじ】

王立国教騎士団、通称『HELLSING機関』に所属する女吸血鬼セラス・ヴィクトリアが、災厄に見舞われた城塞都市フォルトウナの街を疾駆する。  
月光のスポットライトを浴びる。阿鼻叫喚のBGMを流せ。血染めのダンスホールの上で、さあ 化け物と踊ろう。

# 第1話「THE CITY OF SCREAMS」

「いい夜ですね」

頭上にある大きな満月を真紅色の眼差しで仰ぎ、セラス・ヴィクトリアは独りごちた。

夜の冷気と静謐に閉ざされた深い時間。空には彼女の瞳の鏡写しのような真つ赤な月が浮いている。

凍えた月光に赤々と浮き彫りにされた彼女の姿は、ひどく病的だった。

黄鉛色に濁った金髪。どす黒く変色した血のような色の軍服めいた軽装。そのスカート部分から覗く太股と、少女の幼さを残す整った面貌は異様なまでに真つ白く、まるで血の気の温かみを感じられない。

その有り様は人形と喩えるより、まるで死人。

人気など無い、死んだように静まり返った街を、そんな死人のような彼女は独り、悠然と歩いていく。

「静かで、寒くて、廃れきった、まるで悪夢めいた風景画の様」

その独白のような呟きを聞くものは、周囲にわだかまる夜の闇の他に、ない。ゆえにセラスの言葉は誰にともなく零された、ただの寂しい独り言。

否、はたして彼女は本当に独りなのか？

《ああ、本当にいい夜だ。こんな夜は血も見たくなくなるさ。嬢ちゃんと同じ人外の化物フリックなら尚更な》

セラスの頭の中に聞こえる、軽薄な口調の男の声。  
セラスはいささか不満そうに眉根を寄せる。

「む、その言い方じゃあ私まで血に飢えてるみたいじゃないですか、ベルナドットさん」

《しっかしセラス、こんなにチンタラ歩いてて良いのか？ あんまりモタモタしているとインテグラ嬢にどやされるぞ》

セラスの左耳に付けたインカム通信機に女の声が届いたのは、まさにその時だった。

『こちらヘルシング！ セラス、聞こえるか！？』

「イ、インテグラ様！？」

インカム越しでも相手を圧倒する威厳に満ちた大音声に、二重の意味で驚いたセラスは反射的にぴん、と背筋を伸ばしていた。

通信を入れるのはつきりオペレーターだとばかり思っていたのだ。しかも相手は他ならない自分のくご主人様である。

突然のことに狼狽えたセラスは、続く『状況を説明しろ』という言葉に思わず馬鹿正直に答えてしまう。

「あの、ええと……っ、月を見ましたッ」

途端、インカム越しでもはつきりと怒りの気配が伝わってきた。

『月を見てた、だと……？ このバカ！ お前は悪い子だ！ 任務中にも関わらず呑気に月見なんて！ 帰還かえってきたら後でくうめぼしグリグリの刑だからなッ！』

「ええっ、そんな！ 後生ですインテグラ様、どうかくうめぼしグリグリの刑だけはご勘弁を！」

いつかのトラウマか、両側頭部をばっ、と押さえて涙目になるセラス。

それまでの寒々しい静寂は綺麗さっぱり消え去っていた。

『お仕置きが嫌ならさっさと現場に直行しろ！　なんだかんだ言ってお前だけが頼りなんだからな！』

「は、はいいっつ！」

犬に吠えられて逃げる子供のようにセラスは駆け出した。

彼女の脳裏に愉快そうな笑い声が木霊する。

《はっは、大目玉だな嬢ちゃん。こりゃ急がないと怖い怖いママにおケツを引つ叩かれるぞオ？》

「余計なお世話です！」

《カツカすんなよ、なんなら一曲歌ってやろうか？　こういう走ってる時にぴったりな曲目ナンバーがあるんだ》

「ま、まさか……！」

とても嫌な予感に色を失ったセラスは、にやり、という悪戯っぽい笑みの擬音を妙にはっきりと聞いた。

《さあロックンロールだ。

ママが寝転がりこう言ったく

お願い欲しいの　いてく

》

「ぎいやーっ！？」

脳天を衝く卑猥な歌詞にセラスは出せん限りの悲鳴を上げた。そして彼女の足は本人も気付かぬうちに速くなっていた。

「セ、セ、セクハラ！ セクシャルハラスメントツ！ 助けてウォルターさあああん！！」

《残念だが、その執事バトラーさんはとっくの昔にくたばってるぜ。俺と同じで、な。

それに耳を塞いだって無駄ってもんだ。だって俺、お前の裡なかから語りかけてるもんないア。

そら、二番いくぜ。

人から聞いた話では　　エスキモーの　　は冷凍

》

いみじくも止める術のない大変態ソングにセラスは戦慄し、そして赤面した。プシューウ〜つ、と頭から湯気を噴き上げながら、セラスは駆ける足をさらに速める。

通り過ぎてく街並みは相変わらず血の色。中天から街を照らす赤い月光はどこか生々しくて、滴る鮮血を連想させた。

今夜のような赤い月の夜は、ここフォルトゥナの地では凶兆とされている。

曰く、世にも恐ろしい出来事の前触れだ、と

曰く、不吉な夜には悪魔がやって来る、と

人々が須らく寝静まる頃合いにこそ、生を実感する存在もいる。

そう、夜は闇に属する者の時間だ。

だから　　こんな夜は、魔族ミテュアンがよく騒ぎ出す。

《感じよ〜し　　具合よ〜し　　味よ〜し　　すげえよ〜し　　お

前によ〜し　　俺によ〜し　　》

「バカ　　ッー！（泣）」

よく、騒ぎ出す。

+ + +

とある大陸の沿岸部。

城塞都市フォルトゥナ。

6月14日、水曜日。

この地を治めていた教団が壊滅し、統治のシステムが停止して物資が困窮したフォルトゥナに、一人の男がやって来た。

奇妙な男だった。フォルトゥナへの支援物資を届けに来たというその長身瘦躯の男は、昼間はほとんど外に出ることはなく、いつも薄暗い街の大歌劇場の中にいた。

街の復興活動のために外に出ることがあつたとしても、その日は雨や曇り、そして夜間だけ。

決まつて『太陽のない状況』にのみ、男は行動するのだ。

最初の事件が起きたのは、一週間後のことだった。

物資の調達に赴いた住民の一人が、そのまま忽然と姿を消したのだ。

その後も事件は続いた。

十日間の間に次々と、住民十名が消えた。

街は恐怖のどん底に陥れられた。

事件が起き始めたのは男がフォルトゥナにやって来てからだだったため、すぐに彼には白羽の矢が立った。

万が一に備えて、住民は街一番の腕利きである青年を引き連れて男の許へと押しかけた。

だが男はまるで荒事を予期していたかのように、卑劣にもその青年の恋人を人質にとり、そして

そして二日後。

7月5日。

惨劇の現場から辛くも脱したカルスにとっては、まさに疲弊の極みにある夜だった。

事件発生から二日、おぞましい所業により次々と犠牲者が増えていく中、カルスは臨機応変にもリーダーシップを発揮し、パニックに陥った住民達をフォルトゥナ市街地より幾分離れたカエルラ港まで誘導していた。そこが付近一帯では最も広々とした場所であり、多くの人間が集うには最適であったからだ。

港の貨物倉庫に生き残った住民を集め、それから魔術的な道具かつて教団が用いていた、魔具と呼ばれるアイテム をおっかなびづくり使用し、簡易の結界の施したカルスは、外部へと要請した救援部隊の到着を今か今かと待っていた。自分に出来ることはここまでだ。

そして、待ち人は来た。

多くの護衛を引き連れて現れた一人の女性。流れるように長いブロンドの髪と褐色の肌、そして左目に眼帯をした妙齡の美女だった。

アイパッチの上から眼鏡をかけ、そのレンズの向こうから覗く残された右目は品位と理知的な眼光を湛えており、加えて威厳に満ちた佇まいと、仕立ての良いスーツの上に羽織ったコート姿とが、まさに女帝の貫録を漂わせている。

カルスは結界を解くと、その凜々しい女性を招き入れ、緊張に身を強張らせながらも恭しく一礼した。

「お待ちしておりました、ヘルシング局長 インテグラ・ファルブルケ・ウインゲーツ・ヘルシング卿」

受けたインテグラは厳かに頷いた。

その僅かな所作でさえ相手を圧倒するような威厳に溢れているものだから、向き合うカルスは間もなく確信した。このひと絶対く鉄の女だ。



「報告は受けている。で、状況は？」

「芳しくありません。もう既に手に負えない状況でして……」

言葉少なにそう返すカルスだったが、彼にもあまり事態の要領が掴めていなかった。

「そもそも、いったい何がこの街で起きているんですか？」

「喰屍鬼グールです。街はグールの巣窟になっている」

冷然と告げたあと、懐から取り出した葉巻を優雅な動作で銜えるインテグラ。彼女の傍らに控えた護衛の一人がジツポライターでそれに火を点けた。

まるでやかな紫煙をくゆらしながら、インテグラは先を続ける。

「グールとは、吸血鬼に襲われた非処女・非童貞の人間の末路。ヴァンパイアに操られているゾンビども。歩く死体ウォーキングデッド。そんなところですか。」

ですから、この街にはヴァンパイアがいる、と考えられます」

そんなホラー映画のような説明を受けたカルスは、難しい顔で「はあ……」と相槌を打つのみだった。

「おや、あまり驚かれないのですね？ いつもならそんなオカルト話など信じられるか、と反駁されるものですが」

「……ええ、まあ。ここフォルトウナは世界的に見ても悪魔の出現が多い土地でして、そういった常ならざる怪異はむしろ馴染み深いんですよ」

「そういえば、ここは悪魔に対抗するべく組織された魔剣教団の存在がありましたね。ならば吸血鬼といった化け物退治も出来そうな

ものですか？」

「ですが、教団は数か月前に壊滅しまして……」

「なるほど、故に対化物用特務機関、我々『王立国教騎士団』  
通称『HELLSING機関』の協力を仰いだ、と……」

途端、インテグラの目が険しく細まる。それだけで一気に強まる  
威圧感。

「ですが宜しかったのですか？ この土地は排他的な気質と聞きま  
したし、魔剣教なる独自の宗教文化も成り立っている。あなた方か  
ら見れば、我々は教義に反する異教徒。そんな我々に協力を仰ぐな  
ど、あなた方のプライドが許せないのでは？」

それは逆に言えば、我々プロテスタントが反キリストの異教徒ど  
もに協力をするとも思っているのか、というインテグラの挑戦的  
な言葉だった。

高圧的にして威圧的な視線を向けられるカルスは居心地の悪そう  
に身じろぎした。噴き出す脂汗。緊張に口が乾く。

だがそれでも、カルスは一步も引きはしなかった。

忘れられない光景があるのだ。炎に包まれた故郷。崩れ落ちる我  
が家。涙を流す子供たち。

忘れられない無念があるのだ。命からがら逃げ延びたことに安堵  
する傍らで、あのと看自分には何かが出来かもしれない、という後  
悔が胸を焦がす。

なんて浅ましい。ただ一人のちっぽけな人間が吼えたところで一  
体何が変わっていたというのか。今のお前はやり場のない無力感を  
噛み締めるだけの脆弱な男でしかないのに。

でも。それでも。

あんな悲しい光景が続いていい筈がないと、断言できる。その想  
いが間違いである筈がない。

周りを見渡せば、無情な現実<sup>に</sup>打ちひしがれ、蹲<sup>つ</sup>て泣き暮れる人達がいる。その悲しみの涙を止める為に、誰かに助けを求める必要があるというのなら、そうしよう。信徒としてのプライド？ それがどうしたというのだ。いま自分の身近な人たちが泣いていることの方が、ずっと重い。我慢ならない。だから

「でも俺は、これ以上彼らが傷付くを見たくない」

たった一言。体裁を忘れた正直な心で、その気持ちを口にした。それを聞いたインテグラの表情から険が抜ける。

「そうか。そうか。そうか。分かった。我々『HELLSIN G機関』は、君たちフォルトゥナの民の為に尽力するでしょう」

あつさりと協力を快諾する。カルスは分かりやすく拍子抜けした。呆けたような彼の様子に気を良くしたのか、インテグラは幾分柔らかい口調で饒舌に語りかける。

「いや元々ここへ来た時点で我々のやるべき処方は決まっていたのだが、君の言葉を聞いてモチベーションが上がったよ。」

彼らが傷付くのを見たくない、と言ったな？ ああそうだとも。自分の身近な者たちが傷付くのはひどく心が痛む。死んでしまつたら尚更だ。よく分かるよ。私も昔、同じように大勢の部下が傷付き、死に、あまつさえ生ける死体となって喰らい合う様を見た。

許せなつた。彼らにもたらされた余りに早い死と、それを為したクソ化物共<sup>フリックス</sup>が。その気落ちは君たちも同じはずだ。でも君たちにはその正しい憎しみを実行するだけの力が無い。

故に、我々が君たちの牙となつてクソ化物共<sup>フリックス</sup>を喰い尽くしてやる。肉の一片、血の一滴まで何一つ残さず、な」

そう言い切って微笑むインテグラの顔は、獣のような獰猛さと、こちらを安堵させる優しさとが同居していて、カルスは危うく惚れそうになった。

赤くなつてあたふたするカルスを尻目に、インテグラは葉巻の紫煙を泰然と吹かす。

「話を戻しますが、街の中にグールどもを操っている吸血鬼がいま  
す。相手は化け物。ヤツらにとって人間は餌にすぎません。『男吸  
血鬼』は処女を、『女吸血鬼』は童貞の血液を吸った時のみ吸血鬼  
として？繁殖？しますが、それ以外はただの餌にすぎず、グールと  
なつて吸血鬼の下僕になつてしまふ。」

「犠牲者をこれ以上？繁殖？させない為には、母体である吸血鬼本  
体を葬り去る必要がある。それを遂行するのが我々。」

吸血鬼はヘルシングが殺ります」

半分吸殻になつた葉巻の火を揉み消す。

「すでに我々の中でも特に対吸血鬼のエキスパートを市街地に向か  
わせてあります。ものの数時間でケリがつくでしょう」

そいつは一体どんなヤツなんですか、と視線で訊ねるカルス。

インテグラはどこか悪戯っぽく答えた。

「彼女の名前はセラス・ヴィクトリア　いま街を襲っている化け  
物と同じ、吸血鬼ですよ」

+  
+  
+

満月の夜はいい。

夜は闇に属する者の時間だ。とりわけ月の出ている夜は、神話や伝説において魔族の闇の力が増幅する時間とも言われている。

降り注ぐ月明かり。濡れたように光るアスファルトと狭い路地にわだかまる闇のコントラスト。

その月の魔力に満ちた空気を呼吸するだけでヒトならざる魔性が疼く。肉食獣が血に飢えるように。

その暗い衝動に突き動かされるまま、セラスはもう何十体目かのグールを挽き肉に変えた。

フォルトウナの街は生ける死体で溢れ返っていた。

小さな市街地だが、それだけにグール達の密集度が半端ではなく、亡者の群れが跳梁跋扈し腐臭と腐肉とを撒き散らす様はまさに悪夢の景観だった。

とにかく数が多い。いくら殺しても後から後から湧いて出てくる。その鬱陶しい死にぞこない共をまとめて掃討するべく、セラスは両脇に抱えた重機関銃を撃って撃って撃ちまくる。小柄な女の矮躯で鉄塊めいたヘヴィマシンガンを、それも二挺同時に扱うことが出来るのは、人外の怪力を誇る吸血鬼ならではの所業だ。

荒れ狂う銃火。地面を埋め尽くす空薬莖。無尽蔵を思わせた亡者の群れは、いつしかその勢力を減らしていた。

だが最後の一体を残したところで弾が切れた。丁度いい。そろそろ目の前のクズ肉を殴りたかったところだ

用済みとなった得物を放り捨て、無手の状態でグールに肉薄するセラス。敵に反応すら許さない人外のスピードで接近し、肘鉄を叩き込んで転倒させる。

仰臥するグールの頭を、細くしなやかな脚が地面に踏みつけた。凄まじい力で押さえ込まれ、グールは起き上がることが叶わない。

足下でじたばたともがく死にぞこないを、セラスは見下ろす。

嗜虐の法悦に濡れ光る真紅色の眼差しで。

ぐしゃり。

果物が潰れるような音。飛び散る脳漿と目玉の放物線。返り血が、女吸血鬼の白い美貌を赤く汚す。鼻腔を衝く生臭い臭いにセラスは恍惚と身震いし、その顔を嫣然と笑みの形に歪ませた。

《フッカー 娼婦みたいな顔すんなよ、嬢ちゃん。ドラキュリーナになっても処女らしく振る舞えよう。実際にまだ未通の生娘なんだしな》

なんか色々聞き捨てならない言葉に、セラスははっと我に返り、そして羞恥のあまりにボカンと茹で上がった。

先程とは打って変わり、しおらしい乙女の表情で女吸血鬼は己の痴態を恥じ入る。化け物としての性が、つつい戦いに陶醉し、我知らずく雌の顔をしてしまうのが私の悪い癖だ。

赤々と頬を染めながら、セラスは声の主に対して照れ隠しとばかりに憎まれ口を叩く。ちよっぴり涙声なのはご愛嬌。

「まさか、ベルナドットさんに窘められるとは思いませんでした」

《女性を正しい道へ誘導するのも紳士の務めさ》

「なにが紳士ですか。？生きてた頃？は戦争の犬だったくせに」

《ウォードッグ 戦犬じゃねえ、マーセナリー 傭兵だ。間違えんなよ。そこんとこ4649》

あまり変わらないじゃないですか、と拗ねたように唇を尖らせるセラスは、そのとき、遠方に響く高らかな轟音を聞き咎めた。

一瞬にして表情が引き締まり、弾けるように音のした方角を振り向く。

「今の音……！」

《ハジキ ああ、銃声だな。だが妙だ。この土地の人間は、宗教柄、みんな銃を嫌ってるんじゃないかなかったのか？ フォルトウナの戦力 たしか教団騎士って言ったか？ の持つ武器は、バイクみたいにブオンブオン鳴る機械仕掛けの剣だけの筈だろ》

教団の壊滅とともに役目を失った元・教団騎士の何人かは、勇敢にも再び剣を執って反撃を試みたようだが、しかし返り討ちに遭ってグールと化し、その刃でもってセラスに襲い掛かってきたのだ。グールと化した人間は人格と知性の大半を失うが、それでも武器を使いこなすだけの知能は残している。

そうしてセラスに倒された元・教団騎士だったグールの遺した剣  
セラスは知る由もないが、カリバーンと呼ばれている　　が地面に転がっていた。

セラスはさつとカリバーンを拾った。手元の武器はまだ一つ残っているが、得物は多いに越したことはない。

「生存者かもしれませんが、とにかく征きましよう！」

グールが武器を行使できる以上、銃声の主もグールと化している可能性は否めないが、セラスは銃声のした方角へと急いだ。

十

フォルトウナ郊外の森林部、ミティスの森は噎せ返るような血臭と、肉と脂が焼け焦げたような悪臭とに澱んでいた。

誰かがグールと戦闘を行ったのだろう。そして、その人物は疾風のように現れたセラスを待ち受けていたかのように佇んでいた。どうやら気配で彼女の到来を察知していたらしい。二十メートル程度の距離を置いて、二人は対峙した。

セラスは目の前の？男？を注意深く観察する。

肩幅の広い長身を包む濃紺色をしたコート。フードの付いた赤いインナー。空恐ろしいほどに整った顔立ちと珍しい色の銀髪とが月

明かりに映えて殊更に美しく見え、それ故にどこか人間離れた風情を感じさせる。青年と呼ぶにはやや若く、まだ少年と言っても差し支えない年頃の美丈夫であった。

その左手には問題の銃。

大型の回転式拳銃リボルバータイプでありながら、その形状はなんとデリンジャーと同じ二連装バレル。そんなデタラメな改造を施された銃身には青薔薇ブルーローズのレリーフが刻まれている。その花言葉が『ありえないもの』であることを鑑みれば、なるほどあの普通ではありえない形状をした拳銃に彫り込む意匠としてはこれ以上ない相応しさだ。

そして青年の背にはカリバーンと近似した拵えの、だが刀身のサイズがまるで違う巨大な片刃の剣が鎮座していた。

深紅色のグリップと、その剣を？機械仕掛け？たらしめる機関部に施された薔薇の蔓の意匠。青薔薇の拳銃と対を為すようなその大剣は、さしずめ赤薔薇レッドクインといったところか。

それらを駆使してグールと戦い続けていたのだろうか、青年の顔は疲労の色が濃く、右腕は万遍なく包帯に覆われていた。

「貴方、怪我してるの？」

身を案じて駆け寄ろうとしたセラスは、だが青年の鋭利な視線に射竦められ、その足を止めた。まるで手負いの獣のように殺気立った眼光だった。

《目つきの悪いガキだな。ああいうの、戦場で何度か見たことあるぜ。家族を奪われてブチ切れちまった人間の目だ》

「家族……」

セラスの瞳が痛ましいものを見るように細まる。

変わらぬ日常の中、突如として降りかかった厄災。その理不尽に奪われた多くの命。大切な人



どこかで聞いた話だ。身に染みるほどに。

自らの血の海に沈む警官だった父。その正義の人を殺した悪漢に蹂躪される、まだ温かい母の亡骸。その悪夢をただ泣き濡れて見るしかない、何も出来なかつた幼い自分

《感傷に浸つてる暇はないぜ、セラス。あの坊主、どういう訳かお前の？正体？に気付いてるらしい》

裏付けるように、銀髪の青年が誰何の問いを投げってくる。

「あんた……吸血鬼か」

「え　？　あ、ええと、はい。まあ……」

《……何でそこで照れるんだ、お前は》

はにかむセラスの口元から覗いて見える、異常に発達した犬歯。生き血を嚼る人ならざる者の牙。

それを認めた青年の表情が、どこか妄執じみた殺意に凍える。

「そうか……」

青年は小さく頷くと、おもむろに拳銃の狙いをセラスへとつけ

「なら、ブチ殺さなくっちゃな」

あまりにも脈絡のないまま、すんなりとぶっ放した。

## 第1話「THE CITY OF SCREAMS」(後書き)

初めまして、ユートと申します。このたびはヘルシングとデビルメイクライのクロスオーバー小説を投稿させていただきました。三、四話程度の短い物語ですが最後までお付き合いいただけただけなら幸いです。

セラスとインテグラは英米同時バイオテロ事件、別名『飛行船事件』から数年後を想定してますのでそんなにババア(失礼)ではありません。

ちなみに銀髪の青年(あえて名前は伏せる)が右腕に包帯を付けていたのは、今回の事件の首謀者のところへ押しかける際、初対面の相手に右腕を見られるのを嫌がり、そのまま事件発生から今まで付けっぱなしだったからということにしておいてください。

それではまた次回お会いしましょう。ドッカーン(別れの爆発)

## 第2話「LET・S GET READY TO RUMBLE?」

「吸血鬼だつて!？」

ヘルシングの用意した殺しの鬼札ジョーカーがあるところか街を襲っている化け物とオナジモノだと知り、思わず声を荒げるカルスに対し、インテグラはそうです、と平然として首肯した。

「対吸血鬼のエキスパートが人間では心許ない。すぐに傷付く。すぐに死ぬ。心すら弱い。吸血鬼を滅ぼすのに一番効率がいいのは、吸血鬼なのです。そして我々『HELLSING機関』が飼慣らしている吸血鬼は、ヤツらの中でも上等な部類に入ります。吸血鬼を狩るために在る人の形をした人ならざる獵犬 必ずや獲物の喉笛を噛み千切つてのけることでしょう」

目には目を、とはよく言ったものか。

だが実情はそんな？生易しい？表現では片付けられないほど凄惨なものだとカルスは感じた。

「そんなの、まるで共食いだ……」

「共食いとはまたご挨拶ですね。我々人間だつて自分の利己のために同じ人間を殺し、同じ人間に殺される二本足のケダモノだ。それを考慮すればほら、吸血鬼同士が骨肉相食むのも別におかしいことではない。それにしても、共食い なるほど『いい言葉』だ」

皮肉げにくつくつと笑うインテグラを見て、カルスはいさつき彼女に惚れそうになった自分を叱りつけてやりたくなった。

間違いない、この女ひとは付き合う男が苦勞するタイプの女だ。

「化物<sup>フリック</sup>同士が共食い　早速使わせてもらいましたね　する事自体はまちまちにあります。世界には数多の不死の化け物達がいる。ならば同族を屠る存在が一匹や二匹いたとしても何ら不思議ではない。現に我々の飼い犬が？そう？している。聞いた話では、アメリカには悪魔でありながら悪魔を狩る男もいるようですよ」

「悪魔でありながら悪魔を狩る男……そんなヤツが、アメリカにも……？」

呻くようなカルスの意味ありげな呟きに、インテグラは胡乱そうな表情を浮かべた。訝るように眉根を寄せる。

「にも？　？にも？と言いましたか、貴方？」

どういふことですか？　と訊ねられ、はつとなったカルスはなぜか慌てて誤魔化そうとしたが、しかし現在のフォルトゥナが人外の魔境と化していることを思い出すと、韜晦するのも今更という気がしたので躊躇いながらも白状した。

「あ、いえ……噛み砕いて言いますと、この地を統轄していた教団が壊滅したため、教団騎士に代わって悪魔を退治する事務所が開いたんですよ。そのこの経営者である男が、その……悪魔の血を引いていました」

「なぜ？そう？だと判ったんです？」

「いやもう、そいつの右腕を見れば一目瞭然つてもんですよ」

「右腕……？　その者は今どこに？」

「……生きているのなら、まだ市街地にいる筈です。どうやら事件の首謀者に恋人　名前はキリエっていうんですが　を連れ去られたらしくて」

「恋人を救い出すべく死の街を駆け回っているということですか。」

いや中々どうして、ガッツのある御方じゃないですか」

「……ですが、もう二日経っても戻って来ず、というのが現実です。そんな簡単にくたばるヤツとは思えないですが……」

カルスは既にその男の死を観念していた。むべなるかな、とインテグラは同感する。単身でグールの蔓延る死の街の中にいて存命しているなどどうして思えようか。加えて二日も経過しているという時間的な絶望感がカルスの諦念になお拍車をかけている。

ヘルシングの作戦本部の回線に通信が入ったのは、その時だった。

『こちらセラス。本部、聞こえますか？』

インテグラが応答用のマイクを手取る。

「ああ、聞こえているぞセラス。どうした？ 目標の吸血鬼を見つけたのか？」

『いえ、それがですね。途中で奇妙な男に襲われまして。いま対峙しています』

「どんな男なんだ？」

そう問われたセラスは、少しだけ戸惑うような間を空けてから静かに答えた。

『銀髪でコートと着た 悪魔です』

聞き耳を立てていたカルスは、その？銀髪でコートを着た悪魔？についてひどく心当たりがあった。

+ + +

どこにもいない。愛しい人が見つからない。

事件の発端となった吸血鬼に攫われたキリエの行方を探して、ネロは駆け回った。フォルトウナ中を駆け回った。

昼夜を問わず。肉体の疲労に頓着せず。フェルムの丘を越え、ラーミナの山を越え、行く先々で立ちほだかるグールドもを蹴散らしながら。

変わり果てたとはいえ、かつて人間だったモノ、しかも同じフォルトウナに住まう見知った市民だった存在をこの手にかけることに抵抗がない訳ではないが、しかし？こう？なってしまうた人間を元に戻す方法がない。かつて悪魔憑きの人間を相手にした経験上からネロは知っている。以上、速やかにブチ殺してやるのがむしろ情けと言えは情けだった。

そうやって亡者の群れを突き崩して進みながらキリエを搜索してもう二度目の夜を迎えた。一向に好転しない事態に、ただ募るばかりの焦燥。『まだ間に合うかもしれない』という希望と、『もう手遅れかもしれない』という絶望とがネロの中で闘ぎ合う。その痛みが砕けそうになる。

そんな心情など構いなしにグールの一団がまた行く手を阻むものだから、ネロは思わず泣きそうになりながら背中の大剣レッドクイーンを抜き放った。

「邪魔だあああッ！！」

ネロの怒号に呼応するようにレッドクイーンが文字通り火を噴いた。

レッドクイーンやカリバーンといった教団謹製の剣には『イクシード』と呼ばれる、剣撃の速度を向上させるための推進剤噴射装置が備え付けられている。

そしてネ口のレッドクイーンはその出力を極限まで高めてあり、装置によって燃烧した推進剤を激発する際、噴射口から大量の炎を撒き散らすのだ。

「D u s t t o d u s t !」

爆炎を纏う横一閃の斬撃がグールどもをまとめて薙ぎ払い、炎に包まれた生ける死体は間もなく燃え尽きて灰燼へと帰した。

その消滅を最後まで見届けることなく、剣を背負ったネ口はすぐさま疾走を再開した。じわじわと身を蝕む焦燥と疲労とに息を荒げながら。どこにいるのか定かではない恋人の姿を探し求めて。

十

そして辿り着いた先は、フォルトゥナ郊外のミティスの森。

その森林部もグールで溢れていたが、森に充満する腐乱した空気と虚ろな生氣の中に微かだが感じた。忘れもしない、キリエを連れ去ったにつつき吸血鬼の気配を。

視線を落とせば、包帯に包まれた己の右腕がぼんやりと光っている。ネ口の右腕は『ヒトと異なる者』の気配に敏感だ。その対象が強大な存在であればあるほど反応は顕著に表れる。

その姿は見えないが、右腕が反応を続けていることから敵は間違いない近くにいる。もしかしたら木陰に潜んで様子を窺っているのかもしれない。

「隠れてないで姿を見せるよ、クソ野郎。いまキリエを返せば半殺しで済ませてやるぜ?」

周囲の闇を睨み付けながら全神経を外に向けて研ぎ澄ます。僅かな気配すらも逃さない。

しかし、こちらににじり寄ってくるグールどものせいで気配が掻き乱され、狙うべき敵の位置を正確に察知できない。ネロは苛立ちも露わに齒噛みした。

「ウザってえにも程があるぜ。お前らの相手はいい加減飽き飽きなんだよ！」

悪態を吐き、猛禽じみた素早さでグールの群れに斬りかかる。もう何度繰り返したか分からない腐肉をかつ捌く手際は、もはや作業じみていて実に手慣れた感じだった。こいつらの殺し方はこの二日で嫌というほど熟知している。

千切れ飛ぶ手足。砕け折れる骨の音。一方的な殺戮の嵐が、そこに吹き荒れていた。

「はああアアアツ！！！」

最後の一闪とともに螺旋状の剣風が荒れ狂い、それにイクシードの炎が絡み合って、ネロを中心にして赤い竜巻が発生した。その灼熱の渦が周囲のグールを一匹残らず焼き尽くす。舞い上がった肉片が一瞬にして炭クズと化し、消滅の名残のように火の粉が爛々と宙を躍り狂った。

邪魔者のいなくなった空間。ネロはすかさず神経を鋭敏に尖らせ、そして木陰の一角にはつきりとその気配を捉えた。

「そこか！」

腰のホルスターから愛銃ブルーローズを引き抜き、電光石火のようなクイックドロウで気配の方向へと発砲した。



ブルーローズ特有の二つの銃口から撃ち出された二発の弾丸は、だがすんでのところ躲されたのか、僅かに逸れた木の幹を穿つのみだった。

しかし無駄弾ではない。

気配の位置を正確に察知し、そこに向かって攻撃を仕掛けた瞬間、ネロの感覚は闇の奥に潜む見えざる敵の？焦り？と？怯え？とを感じ取ったのだ。それだけで効果は十分である。動揺を誘えた結果、その気配を完全に捕捉することが出来たのだから。

慌てたように遠ざかる気配。しかし、ようやく見出した好機をみすみす逃すほどネロは愚鈍でもなければ甘くもない。自分の右腕は完全にその気配を捕捉している。あとは狩人としての執拗な追跡術<sup>トラッキング</sup>でもって確実に追い詰めるだけだ。血の臭いを辿る獣のように。

ネロの顔にようやく笑みが浮かぶ。それは限りなく獐猛で残忍な笑顔だった。

好き勝手やってくれたクソ吸血鬼め。フォルトウナの街を滅茶苦茶にし、あまつさえキリエを連れ去ったお前にはそれ相應の報いを受けさせてやる。千に引き裂き、万に切り刻み、肉片を地獄の最下層へと叩き落としてやる

その時、ネロの右腕が大きく戦慄いた。痺れるような疼き。主に危険を知らせる警鐘。何か強大な存在が近づいて来る。

弾けるように走らせた視線の先。

金髪の女が、疾風のように森の中へと飛び込んで来た。

二十メートル程度の距離を置いて対峙する二人。ネロはその女を注視する。死人も同然に青ざめた肌。血のように紅く濡れた魔性の瞳。離れていてもひしひし感じる異形の雰囲気。これだけ判断材料が揃えば断定は容易い。

と、包帯の捲かれたネロの右腕を見咎めた女が駆け寄って来る。

「貴方、怪我してるの？」

相手を警戒させないような柔らかい声質だったが、ネ口は油断なく女を睨みつけ、その足を止めさせた。もはや判りきった誰何を口にする。

「あんだ……吸血鬼か」

「え　？　あ、ええと、はい。まあ……」

「そうか……」

女の口元から見える異常に発達した犬歯。血を吸う鬼の牙。

その牙でフォルトゥナの人々の喉笛に噛み付いたのだろう。貪欲にも血を飲み干し、彼らを殺しておいてなおヒトとしての死を与えなかったのだろう。

その女の服を見る。ドス黒く染め抜かれた軍服めいた軽装。何処かおぞましい色彩は、例えばの話、大量の血を浴びたとしたらあんな色取りになるかもしれない。

その女の目を見る。血色に光る赤い双眸。伝説に曰く、真紅色の瞳は災いをもたらす化け物の眼として忌み嫌われている。真実その通りだった。こいつらのせいで俺たちの街は地獄と同意語になってしまった。

（まさか、あの吸血鬼に仲間がいたとはな）

それが大きな勘違いであると、ネ口には知る由もなければ冷静な思考もない。目の前の女がキリエを連れ去った化け物とオナジモノだと知れた時点でもう絶対に殺していい敵だと信じ切っていた。その妄執じみた殺意に濁った瞳を照準に、左手のブルーローズの銃口を女吸血鬼へと突きつけ

「なら、ブチ殺さなくっちゃな」

一切の逡巡なく引き金を引き絞った。信管を打ちつけた撃針が炸薬に火を点ける。

刹那に閃く銃火と轟音。

飛び出した弾丸がジャイロ回転の唸りを上げ、直進し　そして女の？いた？場所を空しく通り過ぎた。

まるで霞のように女は亡と姿を消していた。

否　正確には、女は発射の刹那を見極め、素早く身を屈めることで射線とネ口の視界から同時に脱していたのだ。そのまま獣を思わせる前傾姿勢で肉薄してくる。

「な……！」

事態に気付き、あの吸血鬼より速いと理解した時にはもう遅かった。

瞬時にしてネ口の眼前まで踏み込んだ女は、突き出されたままの左腕を払いのけ、その手からブルーローズを弾き飛ばす。

ネ口は慌てて反対の右腕で殴りつけようとしたが、逆に手首を掴み取られてしまい、そして間髪容れず足払いをかけられた。足が地面から離れる。

転倒したところを後ろから組み付かれ、女の空いている腕が首回到りに巻き付いてくる。掴み取られた右腕は後ろ手に固められた。

まるで流れるような一連の動作で瞬く間に体の動きを封じられたネ口。拘束を振り解こうと身じろぎするが、女の力は信じられないくらいに強く、まるで微動だにしない。吸血鬼ならではの怪力ということがあるか。

「撃たないで、私は貴方の敵じゃないわ！」

女がそう呼びかけるが、ネ口は聞く耳持たぬと言わんばかりに抵抗を続ける。

《あゝ、こりゃあダメだぜセラス。この坊主、お前が敵だと信じて疑ってねえ》

脳裏に聞こえる言葉に、女 セラスはさも困ったように眉根を寄せた。

この青年が自分の言葉を聞き入れてくれなければ、また襲い掛かってくるのは目に見えているため、放すわけにはいかない。

かといってこのまま拘束を続ける訳にもいかない。自分には吸血鬼狩りの任務がある。どうにかして説得できないものか……

《しっかし嬢ちゃん、そんな組み手をどこで習ったんだ？》

「ほら、わたし元・婦警ですも」

の、と続くはずの言葉は驚愕によって遮られた。

後ろ手に固められたネ口の右腕が、なんと無理矢理に拘束から逃がれようとしている。力の入りにくい姿勢にも関わらず。吸血鬼であるセラスの力を上回る勢いで。

「な」

ギリギリと音を立てて少しずつ、しかし確実に膠着状態が崩れていく。

このままでは引き剥がされると危惧したセラスは、自分を上回るこの力への疑念をとりあえず置いておいて次の行動に移った。

両手でネ口の右手首を掴み、体勢を入れ替えるようにして身を翻したあと、続けざま両脚で右腕を挟み込む。太股に感じる包帯の感触。今度は仰向けの状態でネ口の動きを封じた。

「これなら……」

《十字固めか。これも婦警時代に習ったのか？》

皮肉交じりの言葉を聞き流して、セラスはこのままネ口の右腕をへし折ることにした。

手荒な真似はしたくないが、これ以上構ってもいられない。行動力を封じたところで安全な場所まで運んでいく。これがベストだ。

両手両足でもってネ口の右腕を圧迫する。ミシミシと骨の軋む音。人外のパワーを誇る吸血鬼がその四肢を駆使して骨を砕きにかかっているのだ。ただ一本の腕など枯れ枝のようにへし折られるしかない。

それが、ネ口の右腕でなければの話だが。

膨らむ筋肉の束が包帯を押し上げる。分かりやすく力を増したネ口の右腕が、もはや腕全体を固められている事などお構いなしに手首を曲げ、おもむろにセラスの胸ぐらを掴み上げる。

「え、ええ……？」

その信じがたい強引さに驚く暇もあらばこそ、セラスは次に感じた浮遊感とその右腕に？持ち上げられている？からだど気付いた時にはもう、ネ口は寝返りを打つように体を反転させながら女吸血鬼の体を投げ飛ばしていた。

「ええ　　！？」

あまりの力業に間の抜けた悲鳴を上げるセラスは、それでも空中で身軽に体勢を整え、危なげなく着地した。愕然と見開いた目で起き上がったネ口を睨み付ける。

《おいおい、なに力負けしてんだ？　吸血鬼ってのはとっても力持ちな化け物じゃなかったのか？》

「それは、そんなんですが……『アレ』は吸血鬼わたくしよりも力持ちみたいですよ」

どこか畏れるような声で呟くセラスの手には、ネロの右腕に巻かれていた包帯が握られていた。投げ飛ばされる拍子に引き千切っていたらしい。

故に、ネロの右腕を？隠す？ものは何も無く

ようやく外気に晒された剥き出しの右腕は、だが当たり前の肌色をしていなかった。人の形すらしていなかった。

果たしてソレは本当に右腕なのか？

鱗や外殻を思わせる質感の前腕。鋭く尖った指先。およそ人とはかけ離れた風体の異形は、まさに人外の化け物のそれだ。

そんな右腕が人間の持ち得るモノである筈がない。

《こりやあたまんねえな。バケモンだ。あれじゃあまるつきり本物の悪魔デビルじゃねえかい》

「悪魔……！！」

セラスの驚愕に応えるようにネロの右腕が青白く輝いた。

「驚くなよ吸血鬼。いまフォルトウナはあっちゃもこっちゃも化け物だらけだ。そこに悪魔が出て来たって今更つてもんだろ？」

一度窮地に立ったことで幾分か冷静さを取り戻したネロは、饒舌に語りかけながらブルーローズを拾い、それをホルスターに収めると、背中のレストランをすらりと抜き放った。

「さあて、お互いの正体も割れたことだし、そろそろマジで始めるとしてようぜ。化物フリーク同士の戦いをよ」

獰猛な微笑みを浮かべ、相手のハラワタ掴み出す覇気にギラつく瞳で闘争を促すネロ。受けたセラスは対応に迷った。自分の任務はあくまで吸血鬼の討伐であり、悪魔と矛を交えることではない。だがネロがこのまま見逃してくれるとも思えなかった。彼ははじめ、セラスが吸血鬼というだけで襲い掛かって来たのだ。気がつけば、セラスは判断を求めるように通信機の機能をオンにしていた。

「こちらセラス。本部、聞こえますか？」

程なくして主人の厳かな声が返ってくる。

『ああ、聞こえているぞセラス。どうした？ 目標の吸血鬼を見つけたのか？』

「いえ、それがですね。途中で奇妙な男に襲われまして。いま対峙しています」

『どんな男なんだ？』

セラスはしばし戸惑ったが、結局ありのままを答えることにした。

「銀髪でコートを着た 悪魔です」

『悪魔だと？ ああ、そういえばフォルトウナは悪魔の出現しやすい気質の地域だったな。今この街に渦巻く狂乱と混沌に誘われて現れたのやもしれん』

「……どうしますか？」

愚問、とばかりに通信機の向こうにいるインテグラは鼻を鳴らした。

『私の命令は唯一つだぞ、オーダー 従僕。サーチ・アンド・テストロイ 見敵必殺 見敵必殺だ。我々の

邪魔をするあらゆる勢力は叩いて潰せ！ 全ての障害はただ進み押し潰し粉碎しろ！

それがたとえ誰であっても。

それがたとえ何であっても。

それがたとえ 悪魔であっても』

捲くし立てるような言葉の羅列に、セラスの迷いは完全に吹っ切れた。

そうだ、なにを迷っていた。自分は殺せ？なければならぬ？。

微塵の躊躇も無く、一片の後悔も無く塵殺できなくてはならない。

それが化け物の有り様だからだ。化け物である私の在り方だからだ。意識を切り替えるように目を閉じる。次に開いた時にはもうセラスの瞳に甘い感情はどこにも無かった。

「了解、我が主（ヤー、マイマスター）」

短く告げ、そこで会話を終える。通信機の向こうでインテグラに代わり『ちよつと待ってくれ！ そいつは 』という慌てふためいた男の声が聞こえてきたが、構うことなく通信機の機能をオフにした。これで邪魔は入らない。

ついに闘争を了解し、悪魔と吸血鬼は同時に身構えた。緩やかな風になびく髪色は奇しくも相反する金と銀。人外達が放つ殺気が夜の森に氾濫する。堰を切った濁流のように。

ネロの顔から笑みが消える。

セラスからも表情が失われた。

そして二人は口にした。その殺意を。

「貴方を、やっつけます」

「首をスツ飛ばしてやる」



互いの存在をこの世界から排除する為、両者は行動を開始した。

第2話「LET'S GET READY TO RUMBLE?」(後書き)

やっぱりこうなったか！ と作者も頭を抱えております(確信犯

話の流れにいろいろツツコミたい部分があるのでしようが、スルーしていたけると幸いです。整合性なんかティツシュにくるんでポイしましたんで)お

悪魔と吸血鬼ネロセリスが戦ったらどうなるんだろう？ という妄想で塗り固められた物語ですので、作者の趣味が全面に押し出しています。あまり細かいことには頓着しませんのであしからず。それでは次回もまた会いましょう。ドツカーン。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9470y/>

---

Dance With The Freak

2011年12月2日01時45分発行